

リーンの卵子消毒後の排水はどの様に処理すべきか」「死卵の塩水処理による生卵との分離は、発生後の稚魚の生理に影響ないか」等と積極的な質問が出され、調査課小林技官、事業二課、尾崎技官を含めて応答が行なわれた。

質疑の終了後、午後2時30分再びマイクロバスに乗り千歳支場を後にし支笏湖をまわり残雪の深い中山峠を通して本場に帰場午後4時、会議室に於て解散した。

なお本場長挨拶要旨は次のとおりである。

近代科学が発達し古い頭ではついて行けない様な時代となりつつある時に諸君達若い人達は次の様な事を頭に入れてふ化事業を推進して戴きたい。

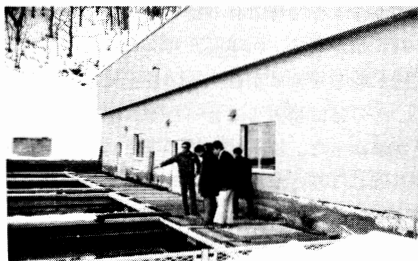
1. 若い人であるから、仕事を実施するにあたりどの様なかたちでも良いと言うものではなく、一般世論からの目を充分考えて公務員らしく仕事を実施してほしい。
2. 国立のさけ・ますふ化場は今後資源管理的な立場で民間を指導していかねばならなく、ふ化増殖事業の技術は決して自然と身につくものではない。口先きだけで言うだけでなく(1)にはまず自分の目で良く見ることである。(2)には疑問を持つこと(3)それから自分で実施してみて技術を身体で憶え身につけ理解を深めてほしい。

3. また長い間ふ化事業にたずさわり自分は技術が進歩しているのだと思っている人がいるかも知れないが、それはその場所の環境に合ったことを憶えているだけであり色々の河川の自然の環境と魚の生態を充分観

察することが、技術を修得していく上に大事なことである。

ふ化場では人工ふ化だけを考えて事業を進めていけば良いと思っている人もいるかも知れないが、自然の生物は計り知れない深いしくみがあるもので自然の節理にさからっては出来ることではなく、自然のポイントをつかんで、いかに利用するか、創意工夫して今後の仕事を進めていくのが技術の修得のやり方であり、これらの事を留意し、健康に気をつけて立派な技術者となり、ふ化場のために健闘して戴きたい。

以上



千歳支場室外飼育池に於いて

NEWS

「千歳支場庁舎、ふ化施設の

落成式举行」

昭和47年6月23日新緑の若葉がひときわさえわたる千歳支場構内において新装なった近代的ふ化施設の落成式と祝賀会が関係者約100名の参集のもと盛大に举行された。

落成式はふ化室の屋内飼育池の上に会場が設置され、北海道さけ・ますふ化場長の挨拶から開始され、次の様な順により落成式、祝賀会が盛会のうちに午後2時30分終了した。

1. 落成式 午前11時開始

1) 北海道さけ・ますふ化場長

逸見文彦 挨拶

2) 式辞 水産庁長官

代読：水産庁振興課課長補佐

田辺陽太郎氏



本場会議室に於ける研修



3) 工事報告

北海道さけ・ますふ化場

事業第二課長 西野一彦

4) 感謝状贈呈

本場長から間組札幌支店、土木部次長
岩本省吾氏に贈呈

5) 祝 辞

北海道水産部長 細田 豊氏

千歳市長 米田忠雄氏

6) 祝電披露

衆議院議員 中川一郎氏他13通

(北海道さけ・ますふ化場長あて)

2. 祝賀会

1) 挨拶

千歳支場新施設落成祝賀協賛会

会長 出羽昌夫氏

2) 来賓祝辞

イ) 北海道水産会 会長 三好竹勇氏

ロ) 北海道さけ・ます増殖事業協会

会長 三原健夫氏

ハ) 祝杯の乾杯音頭

日高町村会会長 日高支庁長

乾杯音頭で二斗樽から、くみ入れたさけ
(酒)をます(桮)で乾杯し、姫鱈、スチール
ヘッドの姿盛、姫鱈塩焼、うどん味噌和え、
姫鱈中落汁、姫鱈にぎり等の献立で長時間に
わたり祝杯がくみかわされた。

北海道さけ・ますふ化場千歳支場、ふ化室、 その他、新施設の工事の経過と概要

本施設は日本海区およびエリモ以西海区の
さけ・ます資源の回復増大の重要拠点である
と同時に、さけ・ます増殖事業発展の基礎と
なる調査試験推進のためにも重要な施設であ

り、関係者一同、長年その完成を期待してい
たものである。

昭和46年は用水調査からはじまり候補の水
源は4箇所、年明けはこれらの調査をどうす
ずめるか融雪をまつ暇もなく具体的な調査に
入った。

4月3日、最大の水源である旧第一ふ化室
裏の沢を源頭まで150 mブルトーズで開削、
前部は岩盤まで掘り下げて、沢筋に集る湧水
の全量を計測、水量は約3.0 t/mと測定され
た。

設計計画は6月までかかり、現地説明は6
月2日、入札は5日に行なわれ、株式会社、
間組が6,983万円で一括施工することに決定
した。

工事の概要は次記のとおりである。

ふ化施設は、鉄筋一部木造平家建、延1,903
㎡で種卵の収容設備はアトキンス式1,000万
粒、増収アトキンス式1,000万粒、ボックス
型式800万粒、立体式200万粒で合計3,000
万粒の収容能力となっている。

また本施設には、鉄筋コンクリート、水深
40cm、750㎡の屋内浮遊池が設置され、稚魚
の発育、生態を配慮した底層注水方式および
光量調整装置を採用して稚魚の健全育成を計
画している。

事務室、実験室等も併設され支場の運営機
能は勿論、全道の技術開発の中ずうとしての
役割をもつ様になった。

用水は、3ヶ所より導水されており、第1
水源は鉄筋コンクリート造り14.8㎡で円型集
水槽、径60cm 2個、90cm 1個、100cm 1個で
集水し導水されている。

第2水源は、鉄筋コンクリート造り長さ22
mの堰堤から成っている。(P-30につづく)

rrano) のトロ湖 (Toro) の一部に少々良好な場所が見られているが、交通その他の関係で将来の課題としたいとのチリ側の要望もあって今回はシンプソン川水系のみにとどめた。

北太平洋のサケ属は何れもスモルトに変じて降海する時期は、次第に日の長くなる春で、産卵のため河川にそ上する時期は秋から冬に至る日の短くなる季節で、この性質は南へ移しても急に変ることないと思われるので、移殖種は何れもこの季節に合せて行動すると考えられる。

従って人工飼育によって急速に育成することが出来ても、降海、産卵の季節は北半球と同様南半球の春 (9月～11月) に降海し、秋 (3月～5月) に産卵する種族が造成されると推定される。

前述の通りこの時期は約半年間の喰い違いを生じ、北で秋に産卵された卵は南の春の終りから夏 (10月～1月) に移殖されるので、スモルトになるのは夏から冬を経て春 (9月～11月) になる公算が多い。

この状態は発生のにちに直ちに降海する魚種は降海が約半年遅れるが、1年間淡水で過す魚種はその期間が少々短縮される可能性もある。

これらスモルトに変じて降海迄魚群は1年間或は2～3年フィヨルドや海岸に出て回帰する時期は北と同様に秋 (3月～5月) となり、河川に浜上して産卵すると思われる。

このような種族が僅かでも生き残れば、その後の再生産は北と同様に繰返えされ、適切な繁殖保護によって資源の増大或は分布の拡大を計ることが可能となるであろう。

(P-27より)

第3水源は、シートパイル、木造、土留による長さ103mの集水装置から成っている。

当場の湧水は凝灰岩盤の透過水で、その湧出地は表層風化帯に生じた縦横の亀裂から湧水しており、従来の工法では、集水が殆んど不可能と考えられていたが、ボーリング・グラウト注入工法の採用により集水に成功した

もので、この工法は今後の集水導水施設の施工に当って参考とすべきものである。

導水路は硬質塩化ビニール管および、コンクリート・ヒューム管を使用し延長、754mに及び3ヶ所の分離した水源からふ化施設までの間、用水を導水している。

稚魚の飼育池は屋外に鉄筋コンクリート造り水深1m総面積845m²の設備で注水量の自在調整も可能となっている。

サクラマス育成施設は鉄筋コンクリート造り、水深1m、総面積231m²の育成池と、これに附属する導水路、排水路、給餌機橋等の設備から成っている。

この施設は日本海区のサクラマス資源の拡大を意図したもので昭和48年度までの3ヶ年計画で整備されることになっている。

その他附属設備として硬質塩化ビニール管138mの排水路および自動給餌機、動力揚水の電動化が整備された。

工事の期間は僅かに4ヶ月間、忙しい日程後昭和46年11月25日、漸く新ふ化室が使用出来ることになり石狩、勇払、鶴川の3河川の卵子ならびに十勝支場から移殖した、さけ、さくらます、からふとます卵子総計2,176万粒を収容してふ化放流事業を実施した。

水量の調整と放流まで、一工程として扱える施設は、異状に対するチェックも早く、1月下旬に来日したソ連の専門家も「生産についての高い水準」と「稚魚の育成を求める技術」について賞讃していた。

生産工程の中で研究が容易になり、技術の開発、施設の改善に役立てることが、この新施設の負うべき使命であり、当場の責任であらうと考える。

(25ページより続く)